

副査

慶應義塾大学 法学部教授
法学研究科委員

萩原 能久

副査

慶應義塾大学 法学部教授
法学研究科委員 博士(法学)

小山 剛

阿南友亮君学位請求論文審査報告

はじめに

阿南友亮君の学位請求論文「近代中国の革命と軍隊に関する研究——広東における中国共産党の軍隊建設、一九二三—一九三五年」は中国共産党（以下、煩雑さを避けるために文脈上誤解が生じない場合に限り、共産党あるいはたんに党と記す場合がある）の創立直後から日中戦争が始まる直前までの時期にかけて、同党が革命のための軍勢力をいかに構築したかを広東省東部に焦点を当てて詳細に検討したものである。

広東省は一九二四年に国民党と共産党による国共合作が始まった後、両党が共同で農民運動に乗り出し、農民を動員して革命のための軍隊を構築しようと最初に努力した場所であった。そして、この地域から両党は共同で軍隊を北上させ、中国全土を武力によって平定し、新たな中央政府を樹立するための企て、すなわち北伐に出発するのである。その意味で、中国共産党の軍隊は広東省で生まれたといっ

てよい。阿南君はまさにこの革命軍揺籃の地において、共産党の軍事力がいかなる素材から、いかに構築されたかを、近年新たに利用可能となった史料に基づき、明らかにしようとして試みている。その際、阿南君の分析の焦点は、共産党の軍事力と社会との関係にある。中国共産党の公式の党史は、一九二〇年代、および三〇年代に行われた土地革命を通じて同党が広範な農民の支持を獲得し、農民が共産党によつてもたらされた社会変革の成果を守ろうと積極的に革命軍に参加した結果、革命運動が飛躍的な成長を遂げたと主張している。つまり、共産党による社会変革が直接的に

強力な軍事力に変換されたとしているのである。そして、土地革命を通じて農村社会の変革が見事に軍事力に変換された実例として、一九二七年夏の国共合作崩壊直後に広東省で成立した海陸豊ソヴィエトがしばしばあげられてきた日本留学帰りの指導者・彭湃の名とともに記憶されるこの革命の「聖地」に関しては、中国の研究者のみならず日本や欧米の研究者も詳細に検討を行ってきたが、土地革命と共産党の軍隊の成長との関係に関する上記の主張については異議を唱えることはなかった。

だが、阿南君は主として広東省档案館に所蔵された当時の党内文書に基づき、この中国革命を象徴する場所におけ

る共産党の軍事力の構築が、社会変革の試みとほとんど連動していなかったばかりか、同党の軍事力が社会に対する収奪に依存していたことを明らかにしている。その点において、本研究はきわめて修正主義的な色彩を帯びており、中国共産党の最終的な勝利に関する問題設定を改めるようわれわれに迫っている。

1 論文の構成と各章の概要

本論文の構成は以下のとおりである。

序論

第1章 中国共産党初期の軍隊建設構想

問題の所在

第1節 革命と軍隊建設に関する中国共産党とコミンテル

ンの認識

(1) 中国共産党の初期の認識

(2) 「革命軍隊」に関するコミンテルンの認識および

中国共産党への指示

第2節 中国共産党における軍隊建設に関する具体的構想

の形成

(1) 中国の軍隊とその兵士に関する中国共産党内の議

論

- (2) 中国共産党第三回全国代表大会以降の軍隊建設構想

結語

第2章 国共合作期における農民自衛軍の整備と「党軍」建設

問題の所在

第1節 農民自衛軍の誕生

- (1) 農民自衛軍に関する諸規定の制定と初期の事例

- (2) 広州農民運動講習所と黄埔陸軍軍官学校の役割

第2節 農民自衛軍の闘争と発展

- (1) 闘争の過程で発展した農民自衛軍の組織形態と役割

- (2) 「農民自衛軍組織大綱」と「農民自衛軍章程」の制定

- (3) 広東における農民自衛軍の規模と内訳

第3節 農民自衛軍の軍隊への編入

- (1) 国民党の取り組み

- (2) 広東北江工農自衛軍の北上

第4節 初期「党軍」建設の実態

- (1) 黄埔軍校教導団の編制過程および特徴

- (2) 共産党の初期「党軍」建設の過程および特徴

結語

第3章 海陸豊ソヴィエトの再検証

問題の所在

第1節 海陸豊における初期武力構築と二度の蜂起

- (1) 海陸豊農民自衛軍の形成

- (2) 農民自衛軍による二度の蜂起

第2節 工農革命軍の編制と第三次蜂起

- (1) 中国工農革命軍第二師、海陸工農革命軍団隊、陸豊工農革命軍団隊の成立

- (2) 第三次蜂起

第3節 海陸豊ソヴィエトにおける土地改革と動員

- (1) 土地革命の試み

- (2) 各種武装組織の新設と「徴兵条例」の施行

- (3) 中国工農革命軍第二師の拡充と中国工農革命軍第四師の編制

第4節 海陸豊ソヴィエトをめぐる攻防

- (1) 陸豊における宗族連合との戦い

- (2) 「向外発展」

- (3) 海陸豊ソヴィエトの崩壊

結語

第4章 東江地域における紅軍の形成と戦い

問題の所在

第1節 大南山における根拠地形成の試み

- (1) 彭湃指導体制の苦闘

- (2) 東江特別委員会と潮陽県委員会の対立

第2節 八郷山根拠地の形成

(1) 共産党残存勢力の集結

(2) 八郷山をめぐる初期の攻防

(3) 八郷山根拠地と豊順県の宗族間対立

第3節 中国工農紅軍第六軍の新設およびその活動実態

(1) 中国工農紅軍第六軍第一六師の五個団の形成

(2) 一九二九年の秋収闘争の失敗と八郷山根拠地における党内対立の浮上

第4節 東江ソヴィエトおよび中国工農紅軍第一軍の成立

立

(1) 東江地域におけるソヴィエト建設と中国工農紅軍

第一軍の実態

(2) 一九三〇年の進攻作戦と八郷山根拠地の喪失

第5節 東江地域における土地革命の実態

(1) 土地革命の方針をめぐる共産党中央の紆余曲折

(2) 秋収闘争における土地革命の状況

(3) 東江ソヴィエト成立以降の土地革命の実態

第6節 東江ソヴィエトにおける動員の限界と東江ソヴィエトの崩壊

エトの崩壊

(1) 東江ソヴィエトにおける紅軍拡大の実態

(2) 東江ソヴィエトをめぐる攻防

結語

結論

序論においては、中国革命に関する研究史が概観され、中国共産党の勝利が国民党との軍事的対決を通じてもたらされたにもかかわらず、共産党の軍隊がいかなる人々からいかにして構成されたのか、また軍隊の活動に不可欠な食料、武器、弾薬がどのように集められたかという問題の検討が不十分であったことが指摘されている。実際、日中戦争期における共産党の新四軍の活動と社会との関係について論じた研究がいくつかあるものの、これらの研究が対象としている時期と地域はかなり限定されている。阿南君によれば、中国共産党の支配地域における党、軍、社会という三者の関係に関する研究が不足しているのは、これまで主流をなした共産党の勝利に関する説明の論理に研究者たちが強く拘束されていたためである。その論理とは、次のようなものである。すなわち、中国共産党はさまざまな方法で伝統社会を根底から改造し、それによって社会の大多数を占める農民の積極的な支持を勝ち取った。積極的な農民の支持は強力な軍事力へと変換され、それによって同党の国民党に対する勝利は確定的なものとなり、一九四九年の最終的勝利（中華人民共和国の成立）へと導いた、というものである。このような論理を採用する研究者は、共産

党の勝利を説明する際に、社会変革を通じて同党に対する農民の支持がいかに獲得されたかという問題に集中し、軍隊の建設や維持といった問題を後景に退けることになる。だが、近年、共産党の社会変革の範囲と程度を根本から疑問視する重要な修正主義的文獻がいくつか現れた。阿南君はそれらの著作からインスピレーションを得て、共産党と農民との最初の接触がなされた場所である広東省に焦点を絞り、中国共産党成立直後からの党、軍、社会の関係を根底から再検討するという本研究の意図を語っている。

第1章においては、初期の中国共産党における軍隊建設に関する構想が検討されている。創設直後の同党の路線とその変化に関する既存の研究は膨大であるが、軍隊建設の構想に関してはほとんど取り上げられてこなかった。というのも、共産党の軍隊——紅軍——の原型は、毛沢東によって一九二七年八月の南昌蜂起に際して形作られたという理解が、中国のみならず日本や欧米においてもあまりにも一般化していたためである。その結果、われわれの中国共産党史に関する理解には欠落が生じていたのであった。阿南君は本章においてその欠落部分を埋めようと試みている。中国共産党は一九二一年七月に誕生した後、プロレタリアートから「革命軍隊」を組織することをうたった。だが、

間もなくコミンテルンから革命のための軍隊をより広範な大衆的基盤の上に置くよう求められた共産党は、一九二二年九月以降、革命軍の兵士は都市労働者のみならず農民からも供給される必要があると主張し始めた。だが、阿南君によれば、実際には革命軍の基盤としての農民への期待は大きくなく、農民を実際にどのようにこの軍隊に動員するかはほとんど議論されなかった。このような姿勢は、すぐにコミンテルンによってたしなめられた。コミンテルンの見解では、宣伝工作と土地革命を通じて農民を革命運動の軌道に引き入れ、労農同盟を実現してこそ民族革命が成功するのであった。かくして一九二三年七月を境に革命軍建設をめぐる共産党の認識は大きく改められ、農民から新しい軍隊を作り出すことが真剣に考慮されるようになったという。当初、共産党は中国社会に遍在する民団と呼ばれた伝統的な民間武装団体を活用し、それを革命軍に改編する方法を考えていた。だが、広東省や湖南省などにおけるいくらかの実践を経て、民団をそのまま革命運動に取り込むことは困難であることがすぐに明らかとなった。なぜなら、この民間武装団体は地主、商人、あるいは郷紳の指図によって動きがちだったからである。そこで、一九二三年末から二四年初頭にかけて、共産党は既存の民間武装団体をそ

のまま活用して農民を軍隊へ動員するという方針を見直し、農民自衛軍と称される新たな農民の武装団体を組織する方針へと転換したのであった。農民自衛軍には、農民の労働・生活環境の改善を図る農民運動の成果を守ると同時に、革命軍に兵士を供給することが期待された。ここに至って、共産党の革命軍建設構想は、明瞭な形で農村における社会変革と結びつくことになったという。

阿南君は本章において瞠目すべき新事実を語っているわけではないが、『共産国際有関中国革命的資料』や『共産国際、聯共（布）与中国革命档案資料叢書』などの史料を用いて、中国共産党がコミンテルンの圧力を受けて徐々に農民への態度を改め、農民を動員して革命のための軍隊を建設する方針を固めてゆく過程を明らかにしている。本章が毛沢東以前の革命軍建設の構想がいかなるものであったかを語ることによって、上述のような研究上の欠落部分を埋めた点は評価できる。

第2章においては、国共合作期の広東省において、国共両党が組織した農民自衛軍の発展過程が詳細に描かれている。これら二つの政治勢力は一九二四年三月以降、農民自衛軍の設置に関する諸規定を定め、広東省の多くの県で農民自衛軍の建設に着手した。農民自衛軍とは、農民運動の

防衛、治安維持、軍事作戦の支援に従事する準軍事的組織であった。そして、この組織は革命軍に訓練の行き届いた、しかも高い士気を備えた兵士を供給するはずであった。農民運動の指導者を育成するために広州に設立された農民運動講習所は、実際に、軍事に関する一定の専門知識を備えた農民自衛軍の指導者を多数輩出し、広東省における農民自衛軍の急速な拡大に寄与した。だが、農民自衛軍の拡大は社会の既得権益層、とりわけ地主層の強い反発を招き、彼らの支配下にある既存の武装団体との衝突が顕在化することとなった。

本章におけるもつとも興味深い観察は、なぜ農民が地主や郷紳によって操縦される既存の武装団体とは別に、国共両党が組織しようとした新たな武装団体に引きつけられたかという点に関連している。阿南君の見解では、一定の地域における宗族同士の対立を背景として、弱小宗族が共産党と結びつき、有力な宗族に対抗しようとしたことが主たる動機であった。これにより、革命と伝統的な械闘（集団間の武器を用いた闘争）とが融合していたというのである。言い換えれば、共産党は農民を革命に動員しながら、ローカルな闘争を有利に展開しようとする農民に利用されてもいたのである。

国共合作下において農民自衛軍は急速に拡大したが、農民革命軍から北伐を推進する国民革命軍への兵士の供給は、ほとんどなされなかったという。国民党と共産党は、それぞれ自らが直接指揮する「党軍」の建設に乗り出していた。だが、阿南君によれば、それらは国民党の黄埔軍校教導団にせよ、共産党の葉挺独立団にせよ、政治委員や党組を通じて制度的には党の指導下に置かれていたとはいえ、金銭によって募集された兵士からなる傭兵軍隊の域を脱していなかった。共産党軍についていえば、党組織を内部に抱えた傭兵軍と農民自衛軍との連携および融合は進まず、それがひとつの重要な要因となつて、国共合作崩壊後に共産党軍は一連の敗北を被つたのであった。

第3章は海陸豊ソヴィエトの実態の再検討にあてられている。海陸豊ソヴィエトとは、一九二七年一月に共産党が広東省東部の海豊県とそれに隣接する陸豊県を占拠した後、これら両県にまたがって打ち立て、翌年三月に国民党軍の侵攻によって潰えたソヴィエト政権を指す。中国共産党の公式の歴史において特筆されるこのエピソードについては、すでに衛藤藩吉「海陸豊ソヴィエト史」（一九五七）⁷、R. Marks, *Rural Revolution in South China* (1984)、F. Galbiati, *Peng Pai and the Hai-Lu-Feng Soviet* (1984)、

葉左能『海陸豊革命根拠地史』（北京、二〇〇〇）などの詳細な研究があるものの、それらの叙述は公式の党史から大きく踏み出すものではなかった。すなわち、既存の諸研究においては、彭湃という日本留学帰りの党指導者が指揮する社会変革が海陸豊において画期的な成果を収め、それを主たる契機として共産党の武装闘争に農民が広範に動員されたという叙述がなされているのである。だが、阿南君は近年新たに利用可能となつた党内文書に基づき、このイメージを完膚なきまでに覆している。

一九二七年夏の国共合作崩壊後、国民党は広東省においても共産党の掃討作戦を展開し、これに対して共産党は江西省から南下した南昌蜂起軍（主として傭兵からなる部隊）プラス農民自衛軍によって抵抗した。阿南君は海陸豊における軍事的な攻防、およびその際の農民自衛軍の闘いぶりを詳細に描いている。公式の党史そして従来の研究で語られる勇敢な農民の姿とは大きく異なり、攻撃の途中で腹をすかせた農民兵たちは帰宅したいと騒ぎ出し、戦闘場所周辺の農村で食糧の略奪や地主の家屋の焼き打ちを行い、敵陣地の攻略に成功した場合に備えて略奪のための布袋を携えていた。一定期間、共産党の宣伝活動にさらされるのとはにかかわらず、農民たちを軍事作戦に参加させるのは

容易ではなかったという。

共産党の軍事力を過大評価した敵が逃亡したことも幸いし、どうか海陸豊を占領した共産党は、来るべき国民党軍との大規模な衝突に備え、農民の大々的な動員に乗り出した。そのための手段が、地主からの土地の没収と貧困農民への土地の分配を内容とする土地革命であった。だが、阿南君は、当時の党内文書の綿密な検討を通じて、通説とは異なり、土地革命はきわめて不徹底であったと結論付ける。地主の駆逐と農民の債務に関する文書の焼却は容易であったが、土地の境界を示す田基（フィールド・マーカー）を破壊し、従来の所有権をいったん解消する試みは自作農と小作農の頑強な抵抗に直面したという。すでに「永代小作」となっていた貧しい農民たちは、地主が去った後、地主から借りていた土地を占拠した。さらに、海陸豊における共産党の武力の中核をなしていた農民自衛軍および外来の兵士たちに対して土地は与えられていなかったという。結局、海陸豊における共産党の戦力は、土地の分配を一切受けず、わずかな金銭と引き換えに武力を提供する傭兵に大きく依存せざるをえなかった。したがって、土地革命と軍隊建設の間に有機的な関連を見出すことはできないという。

海陸豊ソヴィエトは、一九二八年三月に国民党軍の大規模な攻撃を受けると、またたく間に制圧された。民衆による組織的抵抗はほとんどみられず、また抵抗した場合でも連発式ライフル銃と重機関銃で武装した敵の前には農民部隊は無力であった。かくして、阿南君は海陸豊における共産党の活動は、土地革命およびそれと連動した農民の動員が画期的な成果を上げた事例ではなく、せいぜいそれらに関する試行錯誤の事例であつたにすぎないと結論付けるのである。

長大な第4章において、阿南君は海陸豊ソヴィエトの崩壊後、中国共産党が広東省東部に構築した根拠地における党、軍、社会の関係をきわめて詳細に描いている。この根拠地（東江ソヴィエト区）は、日本や欧米の文献ではこれまでほとんど論じられてこなかった共産党支配地域である。

海陸豊ソヴィエトが潰え去った後、彭湃に指導される残存勢力は大南山に移動し、そこにたてこもった。だが、党の上級機関と下級機関の対立、兵士の逃亡、当地の民衆の紅軍加入への消極的な姿勢などが災いして、もちこたえることができなかった。阿南君は東江地区の指導機関であった東江特別委員会のメンバーの多くが海豊県出身者で占められていたことが、下級機関である潮陽県委員会の不満と

大きく関わっていたことを、広東省委、東江特別委、そして潮陽県委の文書から明らかにしている。

大南山の根拠地は、一九二八年六月までに崩壊したが、残存勢力はさらに險しい八郷山にたてこもり、国民党軍と戦った。八郷山における共産党勢力の基盤となったのが、当地の有力宗族と対立していた複数の相対的に弱い宗族であったという。これら宗族は、水上交通の要所である県城を支配する有力宗族と対抗するために共産党に接近したのであった。一方、共産党勢力の討伐に向かった国民党軍もまた有力宗族の私兵に大きく依存していた。かくして、阿南君によれば、国共対立は末端レベルにおいては、伝統的な械闘の延長という様相を呈していたのであった。

阿南君は八郷山で残存部隊および国民党軍から寝返った兵士をかき集めて編成された紅六軍の行動について、とりわけ綿密な検討を行っている。この部隊は営利誘拐、略奪、婦女の売買によって自らを経済的に支え、国民党支配地域の民衆から恐れられていた。地主は「豚」と呼ばれ、繰り返し誘拐され、その度に身代金を取られた。少なからずの兵士は傭兵で、賭博やアヘン吸引といった悪習に染まり、「金がなければ仕事をしない」といった有様であった。とはいえ、営利誘拐や略奪のゆえに、下層の共産党組織はあ

る程度の収入を得ることが可能となっていた。そのため、県委員会の収入のほうが、その上位にある広東省委員会よりも豊かであったという。

東江ソヴィエト区における土地改革の実態についても、阿南君は入念に調べている。現在の中国の諸文献は、同地区において一九二九年末から三〇年代前半にかけて土地の没収・分配が本格的に行われ、これが民衆の「革命情熱」を呼び覚まし、彼らを積極的な「参軍参戦」に導いたという論理を共有している。だが、阿南君は広東省委および各県委の文書を照合し、土地革命が実際にはほとんど成果を収めておらず、多くの村落において自作農と小作農が自らの耕作地を手放すことに執拗に抵抗しつづけたことを明らかにしている。阿南君によれば、東江ソヴィエト区域内では、土地の没収・分配がまったく実施されなかった村落が大半を占め、実際に没収・分配が行われた村落は「赤色郷村」の三割にも満たなかった。それは、誰の土地を没収の対象とするかをめぐる党中央および広東省委の路線が定まらなかつたことに加えて、村落において階級の境界をまたいで作用する宗族の結束力を党が打ち破ることができなかったためであった。土地改革が遅々として進まないことに業を煮やした広東省委および各県委は、やがてそれを富農

と結託して党を内部から破壊しようとする A B 団（アンチ・ボルシェビキ団）の陰謀によるものとし、基層レベルにおける党組織を強引に改造しようとして大規模な粛清に走るのである。これによって、阿南君はいまだにその実態が解明されていない一九三一年の大規模な党内粛清が、広東東部においては農村における土地改革の行き詰まりを背景としていたことを浮かび上がらせている。

かくして、阿南君は、海陸豊ソヴィエト区と同様、東江ソヴィエト区においても、共産党の行った社会変革の結果、農民が獲得した利益を守るために積極的に軍を支援し、またそれに参加するという構図が存在しなかったことを明らかにしている。そもそも土地革命はあまりにも不徹底であったし、紅軍は社会からの支持を受けるどころか、社会に對する収奪によって自己保存を図っていたというのである。

農民が紅軍への加入に二の足を踏んでいたことから、紅軍部隊は戦うほどに兵力を消耗し、国民党軍が一九三二年三月に大兵力をもって掃討作戦を展開すると容易に瓦解した。阿南君のみるところ、紅軍は国民党軍の攻撃によって減んだというより、敵の攻撃をきっかけとして生じた味方の裏切り、逃亡兵の大量出現、そして社会からの孤立によって自壊したと理解するほうが適切なのである。

最後の結論において、阿南君は各章の要点を振り返った後、なぜ十分な社会変革を伴わずとも、中国共産党が自らの旗のもとで戦う武装集団を形成し、維持できたのかを論じている。阿南君によれば、それを可能にしたのは、一九世紀以来の相次ぐ戦乱によってすでに高度に武装化されていた広東の社会に「溢れるように存在していた武装農民と武器弾薬」であった。すなわち、武力によって生存の確保と貧困からの脱出を目論む人々が大量に存在していたこと、また軍隊や匪賊による収奪に對抗するために、社会が宗族、村落、市場町を単位として武装していたことが重要であった。実際、民間の武装組織はライフル銃どころか、水冷式機関銃さえ備えている場合が多々あり、広東の農村では、鋤や鋤を手を持ち、肩からライフル銃をぶらさげている農民は珍しくなかったという。

阿南君によれば、共産党がこのような特徴を備えた広東省の農村に分け入ったとき、同党に接近してきたのは、往々にして有力宗族と械闘を展開していた、すでに武装化された弱小宗族であった。阿南君は、広東省における共産党の軍勢力を構成した農民自衛軍およびその後身である赤衛隊、さらに紅軍のいずれも黄埔軍官学校の卒業生によって指揮・訓練されるものが多く、こうした軍事専門家の存

在が、弱小宗族が共産党に頼ろうとした理由のひとつであった可能性があると指摘している。共産党の旗の下に集まった武装農民は、同党が掲げた「反動派の財産の没収」のために戦うことになるが、彼らにとって、それは敵対する宗族の撲滅と同義語だったという。

こうして、社会変革とは異なる論理によって、共産党は軍勢力を構築することが可能となった。この軍勢力が山岳地帯の地の利を活かして国民党軍部隊を撃破した場合には、武器、弾薬、兵士が新たに獲得され、戦闘力を増した。したがって、共産党にとって軍の拡大は土地革命に頼らずとも十分可能であり、逆に土地改革による軍の拡大は困難であったというのである。そして、阿南君は、このような観察結果は同時期の他の共産党根拠地に関する近年の研究と符合するし、日中戦争期以降の共産党、軍、そして社会という三者の関係にも当てはまる可能性があるとし唆して論文を結んでいる。

2 本論文の評価

本論文の評価すべき点として、以下の相互に関連する三つの点をあげることができる。

第一に、『広東革命歴史文件彙集』や広東省档案館所蔵

史料といった近年新たに利用可能となった史料を駆使して、海陸豊ソヴィエトおよび東江ソヴィエトの実態に関し、通説とは大きく異なる新しいイメージを提示したことがある。阿南君はたんに档案馆史料を綿密に調べただけでなく、指導者の回想録と当時の文書との比較を執拗に行い、さらに国民党側の史料と共産党側の史料を注意深く照合しているが、こうした努力が本研究に実証面での奥行きと手堅さを与えている。

阿南君によれば、以上の二つの共産党支配地域において、土地改革は地主だけでなく自作農や小作農からも強い反発を引き起こすなど、きわめて不徹底な内容であった。農民は自らの生活圏のなかで補助的な軍事活動を行う農民自衛軍や赤衛隊には参加するものの、故郷を離れて戦う紅軍には参加しようとしなかった。また、傷病兵の受け入れを拒否するなど紅軍を支援しようとしなかった。一方、赤衛隊と紅軍は、匪賊とほとんど変わることなく他地域、あるいは「反動諸階級」とされた人々の収奪に熱心であり、それによって自らの組織を維持していた。したがって、土地革命を通じて新たに土地を分配された農民たちが革命の成果を守るために勇躍して紅軍に馳せ参じるという光景はどこにもみられなかったというのである。

共産党が成し遂げた」と主張する土地革命の実際にはひどく乏しい成果と、略奪や営利誘拐によって財政を賄おうとする県レベル以下の党組織という姿は、同時期の鄂豫皖根拠地や閩西根拠地についても指摘されており、ここに初めて描き出されたというわけではない。しかし、長い間中国革命の「聖地」と目されてきた場所においてさえ、類似した「革命運動」の実態を認めることができることを明らかにした点は重要な貢献とみなしうる。

第二に、中国共産党の軍隊建設の過程を、その構想段階から国共合作時期および「土地革命戦争時期」における実践に至るまで、広東省という地域に即して詳細に明らかにした点である。共産党の軍隊建設に関しては、すでに宍戸寛『中国紅軍史』(一九七九)・Chen Yung-fa, *Making Revolution* (1986)・宍戸・馬場・佐藤・内田・三好『中国八路军・新四軍史』(一九八九)・三好章『摩擦と合作』(二〇〇六)などの著作があるが、共産党が最初に農民を動員して革命軍隊を組織しようと試みた広東省に焦点を当てて同党の努力とその限界を包括的に描いた著作は、本論文の他には見当たらない。また、実証の密度という点においても、阿南君の研究は際立っている。阿南君は広東省檔案館に所蔵されている共産党広東省委員会、東江特別委員

会、そしてその下級機関である各県委員会の文書をさまざまな形で突き合わせることににより、紅六軍の第四六団、第四七団、第四八団といった連隊レベルの実態を明らかにすることに成功している。これにより、今日の公式党史の記述とはかなり異なる各部隊の編制や兵力の実状が、ライフル保有率、準備されている弾薬量、兵士に与えられた給与と小遣い金の額まで含めて明らかとなった。さらに、共産党の軍隊を描いた従来の他の文献と比べて特筆すべきは、阿南君が共産党の軍事活動を地域社会の動きと関連付けて描いており、これにより中国革命史の新たな描き方を提示した点である。紅軍がどの程度まで共産党が支配する地域の社会に根差していたか(あるいはいなかったか)に関する分析は、いまや一九三〇年代を超えて日中戦争期、そして国共内戦期にまで拡大することが可能である。本論文は、現在の新たな史料状況から、このような試みが可能であることを示したのである。

第三に、本論文が一九二〇年代から三〇年代前半の広東省東部という限定された空間的・時間的範囲を超えて、他の共産党根拠地および日中戦争時期以降の中国革命史の考察のためのいくつかの重要な視点を提示したことである。まず、共産党の基層組織が、現地の宗族と融合していた点

が注目される。現地で比較的劣勢な宗族との一体化によって、共産党は農村社会に根を下ろすことができた。だが、まさにそれによって同党の社会変革は大いに制約されたのであった。このような連関は宗族が比較的発達していた広東省とその周辺地域においてのみ確認しうるのかもしれない。しかし、江西省と湖南省の境に位置する井冈山根拠地に関する孫江「革命、土匪と地域社会」(二〇〇六)、S. C. Averill, *Revolution in the Highlands* (2006)、鄭浩瀾『中国農村社会と革命』(二〇〇九)などの近年の研究においても、党组织と匪賊組織、宗族との密接な関係が語られているのであり、今後の研究においては、共産党が農村で革命運動を展開するに際して伝統的諸集団が果たした両義的な役割により注目する必要があるであろう。

また、中国共産党の軍事力は同党が社会変革を試みた地域社会に支えられていなかったという観察結果も、例えば、陳耀煌「内生抑外塑——河北地区的共產革命、一九二一—一九四九」(台湾・国立政治大学博士論文、二〇〇五)に描かれている日中戦争期の八路军と地域社会との関係に通じるものがある。共通しているのは、共産党が民衆を革命に動員しようとするとき民衆は暴走して制御不能になりがちであり、そのため社会が軍を支えるという構図が生まれず、

結局、根拠地の防衛と拡大は外来の部隊に依存することになるという点である。このような観察は、中国革命がいかなる意味で、またどの程度まで「民衆革命」であったかという根本的な問題に再び研究者を力強く引き戻すであろう。本論文は以上のような意義を有するが、いくつかの課題がないわけではない。第一は記述の仕方に関するものである。第1章の記述は時間的にいくらか行きつ戻りつして議論の展開を追っていくく、また長大な第4章における紅軍の各連隊の動きに関する記述は、詳細すぎるがゆえに、やや読みにくさを覚える。さらに、用語を必要以上に括弧でくくる傾向も目につかないわけではない。これらの点は、本論文を刊行する際に改善が求められる。

第二に、阿南君は序論において「軍事科学の概念や理論を用いて」共産党の軍事力の歴史的分析を行う必要性をうたっているものの、そのような着想は本論文の議論に十分に反映されているとはいえない。たしかに、阿南君が主張するように、将兵の待遇(給料、昇進、特典)、戦闘での死傷率、負傷・発病した兵士に対する治療・補償、戦死者の扱い、将兵による脱走・略奪・反乱などの逸脱行為に対する対処、兵士の練度・経験・装備、偵察や部隊間の情報共有の仕方などの問題は、中国共産党による動員の成

否や軍事力の質を査定し、また紅軍を他の軍隊と比較する際の重要な材料となるであろう。本論文の随所に、兵器の質の問題が個々の戦闘の帰趨に影響を及ぼしたことに關する興味深い指摘がみられるが、阿南君自身が提起した視点からの議論を十分に展開することは今後の課題として残されている。

そして第三に、本論文もまた、近年次々に現れた中国革命に關する修正主義的文獻に共通する課題に直面している。もし本論文のように、少なくとも日中戦争を迎えるまで、中国共産党が行った革命は徹底した社会変革を伴っておらず、同党の軍事力は社会によって不十分にしか支えられなかったと主張するのであれば、同党の最終的勝利に向かう道筋をどのように展望できるかという点がそれである。阿南君は本論文の結論を、日中戦争期に土地革命が基本的に棚上げされた後、一九四六年から始まる国共内戦期においても土地革命が共産党の軍隊の拡大と強化に直接結びついたか疑わしいと暗示して終えている。それによって、阿南君はなおさら共産党が推進した革命の過程と結末（最終的勝利）とをどのように結び直すかという難問を重く背負い込んでしまうのである。阿南君自身はこの問題に気付いており、本論文のなかで解決の糸口をいくらか示唆してい

るとはいえ、十分納得のゆく解答を見出すことは、今後の課題として残されている。

結論

以上のような若干の課題を残しているにもかかわらず、本論文が現在利用しうる限りの史料を駆使して、一九二〇年代から三〇年代半ばまでの中国共産党、紅軍、広東省の社会という三者の關係を解明し、共産党が活動した他の地域にも適用可能な分析視角を開拓した学問的意義はきわめて大きいといえる。よって、審査員一同は阿南友亮君の研究が博士（法学）（慶應義塾大学）の学位を授与するに十分ふさわしい内容を備えていると判断するものである。

平成二二年一〇月七日

主査	慶應義塾大学法学部教授 法学研究科委員	高橋 伸夫
副査	慶應義塾大学法学部教授 法学研究科委員	国分 良成
副査	慶應義塾大学名誉教授 法学博士	山田 辰雄